

植民地期広島における在日朝鮮人の 人口・就業・生活

——1920年代を中心に

愼 蒼 宇

はじめに

- 1 広島における朝鮮人の来往とその就業形態——1920年代を中心に
- 2 郷土新聞に見る在広朝鮮人と日本社会——1920～1927年を中心に
おわりに——軍都広島の近代史を在広朝鮮人史から捉えなおす

はじめに

本稿の課題は、軍都広島における朝鮮人（以下、在広朝鮮人とする）の来往とその就業形態・生活状況、在広朝鮮人と日本社会との関係について、1920年代を中心に明らかにすることにある。「特集にあたって」で述べられているように、広島は陸軍第5師団と呉海軍鎮守府を抱える日本有数の陸海軍双方の軍都であり、軍事・産業・生活インフラ施設工事で多数の朝鮮人労働者が移入し、戦時期にも強制労働動員が行われた。また、強制労働被害者のなかから多くの被爆者（慶尚南道陝川郡出身者が多い）が出ている⁽¹⁾。

広島の在日朝鮮人史研究は戦時強制労働動員の研究が中心で、広島への朝鮮人の移動と人口、就業状況、社会形成や運動の展開、広島の官民との関わりについての長期的視座に立った通時的な分析や、広島の市町村レベルでの朝鮮人の移出入に関する研究は少ない。そのなかで、広島県統計書や内務省警保局『社会運動の状況』等の史料に基づき、在広朝鮮人人口（1913～1937年：男女比率）、地域別人口（1934年）、出身地（1941年）、世界恐慌後の在広朝鮮人の職業別内訳とその変化、日本人労働者との賃金格差、朝鮮人の労働運動、朝鮮人融和団体の結成と展開を包括的に整理した『広島県史 近代2』（1981年）は極めて貴重な先行研究となっている。ただし、1910年代の

(1) この点は、県北の現代史を調べる会編『戦時下広島県高暮ダムにおける朝鮮人強制労働の記録』（三次地方史研究会、1989年）、深川宗俊『海に消えた被爆朝鮮人徴用工——鎮魂の海峡』（明石書店、1992年）、朝鮮人強制連行真相調査団『朝鮮人強制連行の記録 中国編』（柏書房、2001年）、竹内康人『調査・朝鮮人強制労働3 発電工事・軍事基地編』（社会評論社、2014年）、呉仁済「高暮ダムの歴史再読——戦前・戦中・解放後の広島における在日朝鮮人史の交錯」（『在日朝鮮人史研究』46、2016年10月）などが詳しい。

在広朝鮮人をめぐる動向については、本書でもあまり明らかにされていない。

筆者はこうした先行研究の限界を前提に、広島県の郷土新聞における在日朝鮮人報道とそこで描かれる朝鮮人像の特徴について1910年代を中心に明らかにしたことがある⁽²⁾。資料として用いた郷土新聞は、広島県の強制連行を調査する会監修・制作の「広島県在留朝鮮人4941件関係新聞データベース：1910～1945」に収録された『中国新聞』『芸備日日新聞』『芸南時報』『呉新聞』『大阪朝日新聞広島版』である。本稿はその成果を踏まえつつ、(1) 1920年代における植民地期における朝鮮人の来往とその就業形態・生活状況、(2) 当該時期における在広朝鮮人と日本社会の関係、という二つの課題を明らかにする。(1)については、新たに1930年の国籍調査等を用い、(2)は前述した新聞データベースを用いる。ただし、内地の郷土新聞に描かれた在日朝鮮人に関わる記事には当然、バイアスがかかっており、内容は事件から日常の出来事や文化、全国紙共通の記事から郷土新聞独自の取材記事に至るまで多岐にわたる。あくまでその記事を、(1)(2)課題に即して、そこに現れる在日朝鮮人像の特徴という観点から整理することに努めたい。

とくに、関東大震災時の流言と地方メディアとの関わり、地方社会への影響については、山田昭次による全国の地方新聞記事の収集・分析と、地方での流言飛語と煽動、朝鮮人に対する迫害に関する孤軍奮闘の研究以外ほほない⁽³⁾。本稿では、郷土新聞の記事内容の特徴とその変遷に着目をし、そのなかでいつ在日朝鮮人に対し、「潜在的恐怖感」を伴う蔑視が形成されるようになっていくのかを、関東大震災前後の時期に焦点をあてて考察する。

資料の引用に際しては、平仮名・カタカナは原文のままとし、漢字は常用漢字に改め、適宜句読点を加えた。また、新聞資料の引用において、「鮮人」「人夫」「土方」「土工」「乞食」という表現については、記述者の差別的認識そのものを浮き彫りにするうえでそのまま使用した。

1 広島における朝鮮人の来往とその就業形態——1920年代を中心に

(1) 1917年以前の在広朝鮮人

まず、広島の在日朝鮮人（以降、「在広朝鮮人」）の人口の推移について、おおまかな概要を示しておきたい⁽⁴⁾。【表1】は1913年～1937年までの「広島県統計書」に基づく広島の朝鮮人人口の推移である。日本の道府県別の朝鮮人人口の比較をすると、上位は大阪、東京、兵庫、愛知、京都、山口、広島、北海道、神奈川、岐阜がおおむねの順位であり、広島はほぼ7～10位のあいだを推移していた⁽⁵⁾。

(2) 拙稿「軍都広島における在日朝鮮人像の形成——1910年代の郷土新聞を中心に」（『社会史林』第72巻第4号、2026年3月）。

(3) 山田昭次「関東大震災朝鮮人暴動流言をめぐる地方新聞と民衆——中間報告として」（『在日朝鮮人史研究』5、1979年12月）、同『関東大震災時の朝鮮人虐殺——その国家責任と民衆責任』（創史社、2003年）、同『関東大震災時の朝鮮人迫害——全国各地での流言と朝鮮人虐待』（創史社、2014年）。樋浦郷子「関東大震災における流言の拡散」（『大原社会問題研究所雑誌』第782号、2023年12月）。

(4) なお、1910年代までについては拙稿前掲論文「軍都広島における在日朝鮮人像の形成」がより詳しいので参照されたい。

(5) 外村大『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』緑蔭書房、2004年、44頁。

表 1 広島県統計書による朝鮮人人口の推移

年次	総計	男	女	全国
1913 年	44	39	5	3,635
1914 年	39	35	4	3,542
1915 年	49	48	1	3,917
1916 年	68	68	0	5,624
1917 年	986	804	182	14,502
1918 年	1,022	913	109	22,411
1919 年	818	669	149	26,605
1920 年	959	762	197	30,189
1921 年	1,404	1,148	256	38,651
1922 年	1,681	1,399	282	59,722
1923 年	3,086	2,595	491	80,415
1924 年	3,398	3,030	368	118,152
1925 年	4,025	3,337	688	129,870
1926 年	3,455	2,707	748	143,798
1927 年	5,889	4,600	1,289	165,286
1928 年	5,871	4,590	1,281	238,102
1929 年	5,689	4,218	1,471	275,206
1930 年	7,805	5,541	2,264	298,091
1931 年	8,255	5,846	2,409	311,247
1932 年	10,789	7,816	2,973	390,543
1933 年	14,900	10,736	4,164	456,217
1934 年	17,927	12,286	5,641	537,695
1935 年	17,416	10,671	6,745	625,678
1936 年	19,543	11,942	7,601	690,501
1937 年	19,525	11,772	7,753	735,689

出典：「広島県統計書」「広島県史 近代 2」広島県，1981 年，571 頁。

こうした在日朝鮮人全体の人口変動が日本による渡航政策と深く関係していることもまた指摘されてきたところである⁽⁶⁾。

移民県と呼ばれ、県内に農山漁村の余剰人口を吸収しうる産業の少なかった広島に工業の発展が見られるようになるのは第一次世界大戦の末期である。牽引した産業は、紡績・レーヨンなどの繊維産業や造船業・鉄鋼機械であり、1920 年に安芸郡船越町に誕生した日本製鋼所は東洋一の兵器メーカーで、呉海軍工廠と提携し、軍艦の砲身を中心に海軍兵器生産で栄えた⁽⁷⁾。また、陸海軍の軍都である広島は、陸軍としては日本陸軍の大陸侵略の前進基地としての宇品港（1889 年完成）

(6) 朴慶植『在日朝鮮人運動史 8・15 解放前』三一書房，1979 年，樋口雄一『日本の韓国・朝鮮人』同成社，2002 年，外村大前掲書，水野直樹・文京洙『在日朝鮮人——歴史と現在』岩波書店，2015 年，木村健二『1939 年の在日朝鮮人観』ゆまに書房，2017 年ほか多数。

(7) 後藤陽一『広島県の歴史』山川出版社，1972 年，197-198 頁参照。

を抱え、第5師団本部司令部や配属諸部隊が置かれた⁽⁸⁾。呉には1889年、海軍鎮守府が創設され、1902年に呉線（国有鉄道）が開通すると、海軍鎮守府・工廠における職工の数が増大し、呉市は職工中心の「よそ者の町」と呼ばれるようになった。第一次世界大戦時には、ヨーロッパ諸国から工廠への注文が殺到して戦艦建造がさかんになり、呉市の経済は活況を呈した⁽⁹⁾。

こうして1910年代後半において、広島では市内や呉市を中心に、朝鮮人労働者が増大する素地が出来上がった。それを反映するかのようになり、在広朝鮮人人口は1916年の68名から1917年に986名へと急増している。しかし、1913～16年においても、40～60名程度のあいだを推移しており、他県に比べ、少ないとはいえ、一定数の流入が見られた。

「韓国併合」前から広島にいた朝鮮人について確認できる新聞記事は、「朝鮮飴飴売」『中国新聞』（1910年11月18日）である。この記事によれば、1910年6月に開業した岡山の宇野鉄道布設工事の作業員として1910年の春に釜山近傍から20人ほどの朝鮮人が流入したが、工事落成後、生業を失った中で飴売の行商隊を組み、「飴、飴さ、おいしい飴」と声を枯らして岡山市内を朝から夜まで売り、1日70銭から2円40銭くらいの売上高があったが、陸軍大演習の際に立退を命ぜられ、広島市内に流れ込んできたという。「呉の朝鮮人」『中国新聞』1910年9月4日）にも、併合前から呉の溝路町に居住し、海軍部内と監獄工事の作業員として雇われていた朝鮮人6名（金暎西、金同順、李景称、金者龍、鄭文善、呉龍雲）の存在を確認できる⁽¹⁰⁾。

ほかにも、慶尚北道出身の建設労働者金温（26）は、1907年に朝鮮から九州の若松に来て建設労働者をし、そこで2年間働いたのち、1909年に山口県宇部炭坑の炭坑夫として6カ月働き、その後、京都、四国を渡り歩いて広島にやってきて、呉服店で白縮緬兵児帯一筋価格5円50銭分を万引して1912年7月に逮捕されている⁽¹¹⁾。

また、福山には併合前に朝鮮女性の芸妓がいたことも確認できる。最初の記事となる「朝鮮芸妓と琵琶芸妓」『芸備日日新聞』1910年5月11日）には、福山市桶屋町における置屋業立花屋という妓楼主の棚橋捨吉（46）が韓国に渡って、平壤妓生学校卒業の官妓⁽¹²⁾2人（京城南部生まれの李農仙（18）と、京城西部生まれの李香蘭（21）と交渉し、「官妓の登録を取消」で、5月6日に福山に連れ帰り、幽蘭、紅蓮という芸妓名をつけたと記述されている。しかし、置屋の棚橋はその後、約束手形偽造の罪で尾道の監獄に収監され、2人は棚橋の妻と「乞食」同様の苦境に置かれ、岡山の関西中学（現在の関西高等学校）に通う朝鮮人学生3名が2名の朝鮮芸妓に深い同情を寄せ、債券主や棚橋捨吉の妻と交渉し、妓生2名の旅費を学生が学費から捻出し帰郷させたとい

(8) 第5師団については布川弘「広島の都市形成と第5師団」（坂根嘉弘編『地域のなかの軍隊5 中国・四国——西の軍隊と軍港都市』吉川弘文館、2014年）。

(9) 後藤陽一前掲書、210-214頁。呉鎮守府については、上杉和央「軍港都市「呉」から平和産業港湾都市「呉」へ」（坂根嘉弘編前掲書）。

(10) 「呉の朝鮮人」『中国新聞』1910年9月4日。

(11) 「万引鮮人捕はる」『芸備日日新聞』1912年7月29日、「泥棒は朝鮮人」『中国新聞』1912年7月29日。

(12) 妓生は朝鮮王朝時代、賤民に属し、国家に拘束され、セクシュアリティに関わることを職役とした女性。官妓は全国から選拔され、楽器や舞踏の指南を受けた。その近代化、植民地化における歴史については宋連玉『植民地「公娼制」に帝国の性政治をみる』有志舎、2023年。

う⁽¹³⁾。同じく、1910年12月には広島市内船入村高槻啓次郎方に釜山出身の芸妓である揚鳳仙(18)、金紅今(20)、金桂理(18)、林秋月(18)の4人が抱きかかえられ、広島署に出頭して芸妓の鑑札を受けたことも確認できる⁽¹⁴⁾。

しかし、産業の受け皿が少ない広島に來た朝鮮人は困窮を極めていた⁽¹⁵⁾。一例を挙げると、釜山生まれの仙須伴(24)と貞伊通(25)は、1911年10月長崎で「土方稼ぎ」をし、その後1912年9月1日山口県徳山で練炭所の作業員となっても生活が芳しくないため、「呉へ行けば好い事がある」と聞いて呉に來たが、何も仕事がなく困窮に陥り、1912年10月3日に飲まず食わずの窮状を呉警察署に訴え出たという⁽¹⁶⁾。

このように、「韓国併合」前後の広島の郷土新聞からは、大韓帝国末期にすでに日本で土木労働などに従事しながら、その仕事の終了とともに、別の仕事を探し求め、飴売の行商をしたり、困窮の果てに警察に保護を求める朝鮮民衆が数名とはいえ、いたことを確認することができる。渡航に制約がそれほどなかった時期であるが、広島の産業の不充分さを背景に決して、人数が多く増えることがないまま、1916年までを推移したと考えることができる。

(2) 1917年以降の在広朝鮮人

朝鮮総督府による渡航管理も、在日朝鮮人人口が1万人を超えた1917年から整備され、1918年1月に朝鮮総督府令第6号「労働者募集取締規則」が通牒された⁽¹⁷⁾。その1年後に朝鮮三・一独立運動が発生し、総督府は1919年4月15日に警務総監部令第3号「朝鮮人の旅行取締に関する件」を通牒し⁽¹⁸⁾、朝鮮外に旅行する時には居住地の所轄警察署、警察官駐在所に目的・旅行地を届けた「旅行証明書」を提出し、帰還時も警察官に提示しなければならなくなった。それでも朝鮮人が「職を求めて」日本へ行こうとする動きは減少することがなく、産業基盤が広島に整備されていくことで、1917年以降在広朝鮮人人口は増大し、1918年にはついに1,000名を突破した。しかし、1919年には第一次世界大戦景気が後退し、朝鮮半島での三・一独立運動の発生なども背景に、上記した在日朝鮮人に対する渡航規制も強化され、人口が818名へと減少、1920年までは1,000名を切る状況が続いた。

1920年の在広島朝鮮人の職業別内訳は【表2】のとおりとなる。全体のなかで占める割合は工業関係が圧倒的に多く、土木関係が男327人・女2人、繊維工業が男68人・女性98人、被服身の回り品製造・機械器具製造が男61人、女2人という構成である。商業は物品販売業40人、旅宿・飲食店・浴場等12人、媒介あっせん業1人となっているが、工業も含め、不安定な作業員・自由労働者が大半であった。その後も、この構造は変わらず、1925年では作業員が全就業者の7割、1929年は72.8%、を占めていた⁽¹⁹⁾。

(13) 「朝鮮芸妓と学生」『中国新聞』1911年4月8日。

(14) 「朝鮮芸妓」『中国新聞』1910年12月2日。

(15) 詳細は拙稿前掲論文「軍都広島における在日朝鮮人像の形成」を参照されたい。

(16) 「二鮮人の困窮」『中国新聞』1912年10月7日。

(17) 朝鮮総督府令第6号「労働者募集取締規則」『官報』1918年1月29日。

(18) 朝鮮総督府警務総監部令第3号「朝鮮人ノ旅行取締ニ関スル件」『官報』1919年4月15日。

(19) 前掲『広島県史 近代2』573-574頁。

表 2 朝鮮人職業別人口（1920 年）

職種	男（人）	女（人）	計（人）	構成比（％）
農業	8		8	0.8
水産業	6		6	0.6
鉱業	13		13	1.2
工業	588	102	690	65.3
商業	51	2	53	5
交通業	175	2	177	16.7
公務・自由業	8		8	0.8
その他の有業者	69	8	77	7.3
無職者	19	6	25	2.4
本業者計	937	120	1,057	100
従属者	56	61	117	
合計	993	181	1,174	

出典：前掲『広島県史 近代 2』573 頁。

工業関係のなかでもっとも多い土木関係は、1915 年 4 月に東広島・志和地間で開業した芸備鉄道の広島や庄原方面への延長工事や⁽²⁰⁾、呉市－吉浦間の吉浦道路工事、1919 年に 100 万円をかけて完成した双三郡作木村の広島呉電力の江川水力発電所工事⁽²¹⁾、1921 年～23 年にかけての官営鉄道山陽本線の鉄道複線化工事、1927 年末の三呉線工事、1923 年完成の広村海軍工廠建設工事など、多くの現場で朝鮮人建設労働者が雇用されていたことを確認できるが、後述するように、郷土新聞には土木関係での朝鮮人建設労働者は、より広範囲に広島全般のインフラ整備に関わっていた。

繊維産業では、福島紡績福山支店で 1917 年 10 月に朝鮮人女工 200 余名が雇用されており、第 2 工場で職工松井吉三郎が朝鮮人 2 名を殴打したことがきっかけで、朝鮮人女工 100 余名が会社の取締り不届きに対し紛擾を起こし、一時は同盟休業に至る寸前になり、福山署が説諭して収束した⁽²²⁾。同支店では 1919 年 5 月 10 日にも、言語不通を理由に日本人男工が朝鮮人女工を突き飛ばし、顔面に裂傷を負わせたことに端を発し、会社側が何も対処をしなかったため、朝鮮人労働者がストライキ寸前にまで至っている⁽²³⁾。

在広朝鮮人の人口は、1919 年の旅行証明書制度の導入にもかかわらず、1921～22 年にかけて 1,000 名を再突破して増加し、1923 年には一気に 3,000 名を突破、1925 年には 4,000 名に到達するに至った。その背景には自由渡航制と規制の両存、すなわち 1922 年から 24 年にかけての旅行証明書制度撤廃をめぐる渡航政策のジグザグがあった。この時期は日本社会の都市化に伴って土木工事が増え、工場や炭坑・鉱山で低賃金の不熟練労働者へのニーズの高まりを背景に 1923 年には在日朝鮮人人口全体で 10 万人を突破した時期である。その過程で、1922 年には旅行証明書制度が撤廃

(20) 「北備一帯の企業界」『中国新聞』1917 年 11 月 24 日。

(21) 「百万円の水田工事」『大阪朝日新聞広島版』1919 年 10 月 14 日。

(22) 「福山紡績職工——鮮人を殴打し」『芸備日日新聞』1917 年 10 月 15 日。

(23) 「福紡支店の鮮人盟休」『中国新聞』1919 年 5 月 15 日。

され、関東大震災後に復活したが、朝鮮内で批判が高まったことで、1924年6月、旅行証明書に関する法令は廃止されたのである⁽²⁴⁾。

しかし、1910年代と同様、朝鮮人は切り捨て可能な低賃金労働力として内地の雇用調整弁のように扱われ、極めて不安定な状況に置かれ続けた。その結果、1924年10月頃には朝鮮に帰還する朝鮮人の数が増えたという。大阪朝日新聞朝鮮版による釜山水上警察署岡野高等主任へのインタビューにおいて、岡野は「元来渡航最盛期であった6, 7, 8の渡航者を見るに多数はその日暮しの素質の悪い細民で鮮内で食ふに困った結果内地にいる知人を頼って渡った所は地方不景気の為め仕事がなくその内に僅かの所持金を消費し結局生活に窮して再び帰鮮するに至った者で」⁽²⁵⁾と述べている。

広島の1920年代前半の経済も好景気と景気後退を繰り返す状況であった。第一次世界大戦時には、ヨーロッパ諸国から工廠への注文が殺到して戦艦建造がさかんになって呉市の経済は活況を呈し、1923年には広村に海軍工廠が完成した。しかし、ワシントン軍縮と関東大震災後の行政整理で職工が大幅に解雇され⁽²⁶⁾、軍縮の影響で海軍工廠を持つ呉地方では、朝鮮人労働者がまずクビの対象となり、第一次大戦期の好況期約450名が1922年7月には100名、宮原村は200余名が113人、海軍広支廠では100余人がゼロへと激減した。1924年において、朝鮮人が10人以上雇用されている10カ所の工場・鉱山の被雇用朝鮮人の勤続年数は1年未満43%、1～2年29%、2～3年20%、3～7年8%という割合であり、朝鮮人労働者の雇用状況が極めて不安定なものであったことがわかる。同一労働でも日本人労働者とのあいだに賃金格差があり、1924年において窯業では日本人の普通日給2円50銭、朝鮮人は1円、繊維工業－日本人1円50銭、朝鮮人1円、金属工業・製版印刷業－日本人1円50銭、朝鮮人1円20銭という格差があったとされる⁽²⁷⁾。また、紡績女工の多い福山では朝鮮人女性の平均が1日83銭、日雇朝鮮人の男性が1日1円20銭～2円で⁽²⁸⁾、朝鮮人内でも稼ぎに男女格差があった。

それでは当該時期の在広朝鮮人の人口・就業・生活はどのような状況にあったのであろうか。ここでは広島市社会課編『在広鮮人生活状態』（1926年）に基づいて整理してみよう。この資料は1925年5月の広島市社会課員による朝鮮人集住地の調査に基づくものであり、1925年国勢調査の結果も収録されている⁽²⁹⁾。

調査結果からは、在広朝鮮人が主に広島市内中心に多く居住していることがわかる。年齢層は20, 30代がもっとも多く、有配偶者は総数の44.8%にのぼり、10歳以下の子どもは102名いて、男52名、女50名とほぼ同数であった。人口がもっとも多いのが吉島町の218名で、その後、大須賀町の145名、福島町の100名という順であり、「大部分が一家屋内に数世帯、十数人又は数十人

(24) 水野・文前掲書、16-18頁。

(25) 「内地の不況に逐はれ故郷に帰る鮮人の群」『大阪朝日新聞朝鮮版』1924年11月2日。

(26) 後藤陽一前掲書、210-214頁。呉鎮守府については、上杉和央「軍港都市「呉」から平和産業港湾都市「呉」へ」（坂根嘉弘編前掲書）。

(27) 前掲『広島県史 近代2』574-576頁参照。

(28) 「福山在住の鮮人と生活振」『大阪朝日新聞広島版』1924年5月28日。

(29) 宮本正明「資料紹介 広島市社会課編『在広鮮人生活状態』（広島市役所、1926年3月）」（『在日朝鮮人史研究』No.36、2006年10月）。

共同生活をなしその生活状態は不潔であると謂ってよい。殊に大須賀町に於て甚だしい」⁽³⁰⁾と記述されている。出身本籍地は総数の8割が慶尚南道で、そのほかは慶尚北道、全羅南道、全羅北道と続いた。広島在住年数は、半年未満が全体の85.9%を占め、10年以上はたった1世帯であった。職業は月収を得る者が39名、大半の443名が日雇であり、収入は前者が平均月36円、後者が平均日1.39円、職業は作業員（月25名、日406名）が大半で、その後多い順に左官（日7名）、撒水夫（月5名、日2名）、飴行商（日5名）、鉦職工（日5名）、仲仕（月4名）、畳職（日4名）、屋根屋職（日4名）であった。

しかし、増大する日本への朝鮮人渡航者に対し、行政当局は朝鮮人渡航の抑制を志向するようになる。日本内地での失業者の増大の一方で、朝鮮農村における人口流出も大きくなったからである。そこで採られた措置が釜山水上警察署における朝鮮人渡航の選別の確立であり、具体的には1925年10月から①無許可労働者募集に応じ渡航する者、②内地における就業不確実な者、③国語を解せざる者、④必要な旅費以外の所持金10円以下の者、⑤モルヒネ患者、の5項目に該当する者は渡航が阻止されるようになった。さらに1928年7月からは、「渡航証明書」を地元警察が発給し、それを持たない者は出発港で阻止される体制が確立された⁽³¹⁾。

この時期の在広朝鮮人の人口は、1926年に減少するも1927年には6,000名近くまで増大し、1928、29年と足踏みをして、1930年には7,805名、1932年には10,789名へと急増していった。この急増を支えたのが「密航」の増大であり、世界恐慌を背景とした朝鮮農村の荒廃と日本における軍需インフレ下での労働力需要の増大が大きな要因である。他地域と同様、渡航規制の政策が強化されてもなお、在広朝鮮人の人口は増加していったのである。

この時期の在広朝鮮人の職業、人口の特徴を分析しうる資料として、1930年の国勢調査がある⁽³²⁾。調査結果から見えることとして、二つの点を指摘することができる。一つ目が、職業の多様化である。【表3】は朝鮮人職業別人数を多い順に整理したものである。

【表3】に挙げられなかった職業で多い順に挙げると、漁業労務者、配達夫、粗紡工、その他の土木建築の工事に従事する者、護謨成型工、伐木夫、自動車運転手、商業手助、染色工、絲返工、精紡工、撚絲工、理髪師・髪結・美容師、船舶油差・火夫・石炭夫となる。同じ外地出身者である在広台湾人は学生生徒95人、従属者4人、医師、学校長、船舶油差、物品販売業主、裱具師それぞれ1人である⁽³³⁾。

【表1】の在広朝鮮人人口と国勢調査の朝鮮人数は統計のしかたが異なるため、単純に数の増減の比較することはできない。しかし、その内容の傾向を比較すると、1925年時と同様、従属者（扶養家族のこと）が大きな割合を占め、1920年よりもその割合が飛躍的に増加していることがわかる。従来から指摘されてきたように、1920年代において、家族ぐるみの渡航・内地での滞在（ただし、それは不安定で短期の傾向）が増えたということであり、それは1930年の国勢調査における年齢11区分別の朝鮮人人口でも、30～39歳人口2,395名の次が、0～9歳人口2,213名であり、

(30) 宮本正明前掲論文所収『在広朝鮮人生活状態』。

(31) 外村前掲書、25-32頁参照。

(32) 内閣統計局『国勢調査報告 広島県』1930年、広島県立図書館所蔵。

(33) 前掲『国勢調査報告 広島県』1930年、104-105頁。

表 3 朝鮮人の職業別人口

職業	総数	男	女
従属者	3,849	1,173	2,676
土工	1,348	1,348	0
日傭（と単に申告したる者）	1,088	1,078	10
学生生徒	685	539	146
仲仕・荷扱夫・運搬夫	408	408	0
露店（屋台店含）・商人・行商人・呼売商人	304	292	12
その他農業労働者	266	260	6
炭焼夫	202	179	23
作男・作女	177	177	0
その他の無業者・職業の申告なき者	148	73	75
店員・売子	138	138	0
雑役夫	129	125	4
通勤の家事使用人	107	105	2
掃除夫	88	87	1
繰絲工	79	2	77
菓子・麵麴（注：パン）・水飴製造工	76	74	2
主人の世帯に在る家事使用人	76	32	44
浴場業主・使用人	62	55	7
荷車挽・馬方	60	59	1
物品販売業主	60	60	0
林産物業主	55	55	0
舵夫・水夫	54	54	0
土木建築業主・請負業主	52	52	0
農耕業主	47	46	1
鋳物士・鋳造工	47	47	0
石切出夫	46	46	0
化学的工程に従事する労務者（他に分類せられざる者）	42	39	3
左官	40	40	0
屋根職	40	40	0
料理人	39	39	0
農業手助	39	17	22
魚介藻・肉・蔬菜・果実類加工品製造工	38	32	6
旅館・料理店・飲食店・貸席業の番頭・客引	37	29	8
荷造工・発送工・包装工	35	31	4
牧夫・畜産労務者	34	34	0
製材工・木挽職	33	33	0
旅館・下宿屋・料理店・飲食店等の女中・給仕人	32	12	20
機織工	31	27	4
煉瓦・瓦製造職	31	28	3

出典：内閣統計局『国勢調査報告 広島県』1930 年，104-105 頁をもとに作成。

内地生まれの在広朝鮮人が947名（男461名，女486名）に及んでいることからわかる⁽³⁴⁾。

また，土木関係が圧倒的に多く，不安定な作業員が全就業者の7割以上を示している状況は一貫して大きく変わらない。しかし，農業労働者，炭焼夫，作男・作女の割合が上位7～9番目になり，林業・農業主も一定数いるなど，農業・林業従事者が増え，行商・飲食・旅行業以外の職種にも朝鮮人が多く雇用されるなど，職業が多様化していることがわかる。

二つ目の特徴は，人口が従来の広島市，呉市，福山市など都市部・沿岸部への偏在から県全体に広がっていることである。1930年の国勢調査における広島県地域別外地人人口は朝鮮人人口とは違うが，外地人人口のうち台湾人はほとんどが学生であり，広島市内に集中していると考えられ，台湾出身の104名を除けばそれはほぼ朝鮮人人口と考えて差し支えない。また，人口の傾向として，とくに市外農村の外地人人口は朝鮮人人口と近似していると考えることができる。

外地人人口の多い地域を見ると，まずは広島市4,315名（全人口は270,417名。以下，カッコはその市郡町村の全人口），呉市714名（190,282名），福山市418名（38,214名）と都市が多いのは当然である。しかし，郡別人口を見ると，賀茂郡882名（107,801名），安佐郡852名（68,976名），佐伯郡832名（102,753名），比婆郡687名（68,161名），豊田郡571名（115,412名），安芸郡406名（106,896名），山県郡384名（53,647名），御調郡254名（124,043名），双三郡156名（62,363名），高田郡152名（58,721名），甲奴郡129名（18,622名），沼隈郡122名（91,631名），神石郡91名（28,593名），世羅郡89名（37,432名），芦品郡88名（66,105名），深安郡53名（62,338名）である。広島県の全人口1,692,136名に占める外地人人口11,240名の割合が約0.66%であり，それを上回るのが広島市の約1.6%，安佐郡の約1.24%，福山市約1.1%，比婆郡約1%，賀茂郡約0.82%，佐伯郡約0.81%，山県郡約0.72%，甲奴郡約0.7%である。都市や広島市周辺（安佐郡・佐伯郡・安芸郡），広村・竹原町を抱える賀茂郡だけでなく，県最北部の比婆郡，北西部の山県郡，東部の甲奴郡にも朝鮮人人口が広がりを見せていたことがわかる。

次に町村別の人口の順番は，賀茂郡竹原町218名（8,921名），安佐郡原村152名（2,299名），賀茂郡広村142名（16,971名），比婆郡比和村123名（5,085名），佐伯郡観音村117名（2,703名），賀茂郡三津町110名（4,913名），山県郡戸河内村106名（6,608名），安佐郡三入村100名（2,444名），山県郡美和村95名（1,841名），佐伯郡大野村92名（7,108名），豊田郡中野村90名（5,125名），比婆郡東城町86名（4,901名），安佐郡三川村82名（2,973名）の順である。なかでも広島市の外地人口割合を超える割合となっているのが原村約6.6%，美和村約5.2%，観音村約4.3%，三入村約4.1%，三川村約2.8%，竹原町約2.4%，比和村約2.4%，三津町約2.2%，大野村約1.8%，東城町約1.8%であった。竹原町と三呉線工事の関係のように，多くの場合，道路・鉄道・発電所工事をはじめとする土木関係労働者が多く集まったことがその要因であると思われる。

また，朝鮮人女性の比率が高い地域としては，福山の50.2%が人数の多さも含め，突出している。これは前記したように，福島紡績福山工場に1917年以降，多くの朝鮮人女工が雇用されていたことが関係しており，女工が福山の景気を支えていると報じられるほどであった⁽³⁵⁾。福山では

(34) 前掲『国勢調査報告 広島県』1930年，64頁。

(35) 「福山の女護ケ島 20の妙齡の女工手の生活」『中国新聞』1922年6月13日。

1927 年において、朝鮮人女性は農家の刈入、田植えの手伝いにも差し向けられ⁽³⁶⁾、男性は近郊地方へ作業員として出稼ぎに行っていたという⁽³⁷⁾。ほかにも、安芸郡熊野町 55.2%（女性 16 名／総数 29 名）、賀茂郡三津口町 51.4%（19 名／37 名）、深安郡本庄村 78.6%（11 名／14 名）、芦品郡府中町 50%（16 名／32 名）といった地域で女性が男性よりも多い。本庄村は葦陽製糸株式会社があり、府中町は内田製糸、佐藤製糸工場があるとともに商業流通の要地であった⁽³⁸⁾。

それではこの時期の在広朝鮮人の職業・労働・生活、日本社会との関係はどのようなものであったのだろうか。郷土新聞を資料に、そこに現れる当該時期の在広朝鮮人像を丹念に拾い上げることによって接近を試みたい。

2 郷土新聞に見る在広朝鮮人と日本社会——1920～1927 年を中心に

記事内容の分類と傾向

ここからは 1910 年代の広島の郷土新聞における在日朝鮮人に関する記事の考察を行う。

本稿では「広島県在留朝鮮人 4941 件関係新聞データベース：1910～1945」に収録された『中国新聞』『芸備日日新聞』『芸南時報』『呉新聞』『呉日日新聞』『呉公論』『大阪朝日新聞広島版（以下、大朝広島）』『大阪朝日新聞朝鮮版（以下、大朝朝鮮）』のうち、1920 年～1927 年に関する 1,004 件の記事を整理し、考察を試みた。

広島で最初の本格的な郷土新聞となったのが憲政会派の『芸備日日新聞』（1888 年発刊）であり、それと政治的に激しく対立したのが自由党系、政友会系を中心に創刊された『中国新聞』（1908 年『中国』から改名）であった。しかし、『芸備日日新聞』は徐々に衰退し、1935 年、経営をライバルの『中国新聞』に委ねる形になり、事実上吸収されることになる。次に呉の三新聞、『呉公論』は週刊紙として 1906 年に発刊、1 年後に日刊紙となり、『呉日日新聞』は 1909 年に発刊された。『呉新聞』は一度廃刊されていたが、1925 年、『中国新聞』によって海軍所在地の日刊新聞として改めて発刊された。『芸南時報』は 1913 年に創刊（戦後、『芸南新聞』へ）され 1932 年まで続いた新聞である⁽³⁹⁾。

1920 年～1927 年にかけての上記のデータベースに収録された在広朝鮮人関係の新聞記事の件数と、新聞ごとの件数は『中国』375 件、『芸備』252 件、『大朝広島』150 件、『呉日日』77 件、『大朝朝鮮』64 件、『呉新聞』54 件、『呉公論』28 件、『芸南』4 件となり、当時部数を競った『中国』『芸備』が多いことがわかるが、『大朝広島』も多くの記事を掲載しており、1925～27 年においては呉の三紙も多くの記事を残している。

次に記事の内容をおおまかに整理すると、以下の 7 つのように分類することができる。

- ① 広島での雇用・就業状況（男女）
- ② 朝鮮人の困窮・保護・救済

(36) 「鮮人女子の就職口は刈入や田植えの手伝ひ 福山職業紹介所統計」『芸備日日新聞』1927 年 6 月 20 日。

(37) 「福山市在住の鮮人は大部分が土工稼ぎ」『芸備日日新聞』1927 年 9 月 19 日。

(38) 前掲『広島県史 近代 2』188-200 頁参照。

(39) 中国新聞社史編纂委員会編『中国新聞 80 年史』中国新聞社、1972 年、36-154 頁参照。

表 4 郷土新聞の内容別記事件数

	合計	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1920 年	42	7	0	10	3	5	16	1
1921 年	103	19	10	24	5	4	37	4
1922 年	95	14	6	28	3	14	24	6
1923 年	122	41	5	21	1	0	36	18
1924 年	88	10	14	18	5	11	21	9
1925 年	172	56	24	29	15	6	19	23
1926 年	200	45	27	45	11	17	36	19
1927 年	182	34	29	38	24	14	19	24
合計	1,004	226	115	213	67	71	208	104

- ③ 日本人との争闘、暴力事件
- ④ 個別犯罪（詐欺、窃盗など）
- ⑤ 労働・民族運動
- ⑥ 官憲・社会による在広朝鮮人差別・危険視（「不逞鮮人」像につながるもの）
- ⑦ 内鮮融和の動き。

【表 4】は、これらの年別の記事件数を比較したものである。

ただし、これらはすべて密接に結びついており、⑥⑦は単なる出来事、事件の記述ではなく、日本社会における朝鮮人に対する差別意識や同化実践の顕在化しているケース、記者の朝鮮人観が明確に表れているといえる。以下、①～⑥の記事数の変化とその内容の特徴を分析し、そのうえでここに見られる朝鮮人像とその変化の様相を、①②④⑥を中心に明らかにしたい。

（1）就業・失業・困窮——生死をめぐる攻防

不安定な就業・苛酷な労働

もっとも多いのが①雇用・就業・労働に関するものであり、その不安定な状況や、在広朝鮮人がそもそも内地に渡航し、広島に流入してくる原因となった生死に関わる生活の困窮（②）、それと関わる形で発生する詐欺・窃盗などの個別犯罪④も記事として大きくフレームアップされている。ここでは①②④をとりまとめて、そこから見えてくる在広朝鮮人の労働・生活状況を浮き彫りにしていきたい。

就業・労働・失業をめぐるのは、1923、25～27年に記事が多くなる。1920～21年は戦後不況・軍縮不況の影響を反映し、解雇され失業した朝鮮人が呉⁽⁴⁰⁾や広島市内に仕事を求めて流れ込んでくる様子や⁽⁴¹⁾、軍縮をめぐる不透明な見通しのなかで朝鮮人作業員の雇用や解雇が繰り返される広海軍工廠の様子などが報じられていた⁽⁴²⁾。他方で、植民地朝鮮からのプッシュ要因を背景に、広島

(40) 「失業した朝鮮人が呉に流入」『大阪朝日新聞広島版』1920年9月21日。

(41) 「朝鮮人労働者が失業して市内に流れ込んでくる」『中国新聞』1920年11月28日。

(42) 「失業鮮人流出 広村方面から」『中国新聞』1921年6月12日、「広村の鮮人激減して40余名となる」『中国新聞』1921年7月13日、「華府会議の為一時沈衰せる広村」『中国新聞』1921年11月30日。

の不安定な経済とは裏腹に朝鮮人労働者の広島への流入が止まらず⁽⁴³⁾、1922～24年にかけて広島県の広範囲の工事現場で朝鮮人労働者が労働に従事する様子を『中国新聞』は「孫秉熙が死なうが上海の仮政府が潰れやうが安重根の弟が刺客となって内地に潜入して来ようが」専ら労働に従事している⁽⁴⁴⁾などと報じていた。前述した道路・鉄道・発電所・造船・紡績など以外では、第5師団の射撃面改造工事⁽⁴⁵⁾、広島工業が工事を請け負った国立の魚族養殖場工事（豊田郡大長村）⁽⁴⁶⁾、三次の広島電気太田川第2水力電気発電所工事（朝鮮人作業員約250人）⁽⁴⁷⁾、佐伯郡・安佐郡・山県郡にまたがる出雲水力発電所工事⁽⁴⁸⁾、広島瓦電の宮島線軌道敷設工事（一時中止も）⁽⁴⁹⁾、尾道市上水工事⁽⁵⁰⁾、竹原築港工事⁽⁵¹⁾、広島電気の電線仮設工事（府中－三原間）⁽⁵²⁾、市立呉中学校の建設⁽⁵³⁾、である。また、夏期の撒水夫も朝鮮人労働者が担っていたが、撒水自動車の登場で淘汰されたという⁽⁵⁴⁾。そのなかで慶尚南道固城郡出身の金夢伊（36）は、1917年から1927年まで、広島市上流川町、鉄砲町、八丁堀、織町の撒水夫を夏期の季節労働者として勤め、広島市に重宝されていた⁽⁵⁵⁾。

しかし、前述したように1920年代の広島経済はあまりに不安定であった。1923年3月末には広島県2,400名ほどの朝鮮人のうち無職が200名以上に及び、その様相は「白化する広島」⁽⁵⁶⁾と不穏に表現されていた。しかも、朝鮮人労働者の賃金が日本人よりも安価であるために、朝鮮人労働者の増加＝日本人の失業という対立構図が強調され、不満が朝鮮人に対して向けられるようになった⁽⁵⁷⁾。これは後述するように、1920年代前半に頻発するようになる朝鮮人・日本人労働者の争闘・暴力事件の背景にもなった。

1925～27年にかけて、渡航規制が強化されるなかでも朝鮮人の流入が増えてくると、朝鮮人の無職者もまた増加の一途をたどった。広島市内の職業紹介所によれば、1925年初頭において、朝鮮人で就職できたのは半数に過ぎず⁽⁵⁸⁾、同時期、広島市西署管内の朝鮮人生活状態の調査でも三分

(43) 「鮮人労働者 事業界不振と反対に続々渡来する」『大阪朝日新聞朝鮮版』1921年1月22日、「連絡船で雪崩れ込む鮮人労働者の群」『芸備日日新聞』1921年3月11日。

(44) 「県下の鮮人2000名 一番多い呉広島何れも専心労働に従事」『中国新聞』1922年5月26日。

(45) 「江波の射撃面改造 11月中に全工事竣成」『中国新聞』1922年6月9日。

(46) 「魚族養殖場工事着々と進捗しつつある」『芸備日日新聞』1923年1月8日。

(47) 「発電所工事」『大阪朝日新聞広島版』1923年5月10日。

(48) 「広島県第一の称ある出雲水力発電所」『中国新聞』1923年6月5日。

(49) 「広島瓦電の宮島線軌道敷設工事中止の各方面に及ぼせる悪影響」『中国新聞』1923年8月18日。

(50) 「尾道市 上水工事進捗せず」『芸備日日新聞』1923年8月19日。

(51) 「鮮人労働者多数来集せん」『芸南時報』1923年11月5日。

(52) 「電信第2連隊 送電線の難工事」『中国新聞』1926年3月23日。

(53) 「鮮人工夫土砂埋没 生命は助かる」『呉日日新聞』1926年5月11日、「土砂に埋まる 鮮人の重傷」『呉新聞』1926年5月11日。

(54) 「影を消しさうな鮮人撒水夫」『中国新聞』1925年4月5日。

(55) 「10年間勤続の鮮人撒水夫上流川外4ヶ町」『中国新聞』1927年2月20日。

(56) 「白化する広島」『芸備日日新聞』1923年4月18日。

(57) 「鮮人増加して内地失業者愈々多くなる」『芸備日日新聞』1923年6月30日、「流れ込む鮮人に内地労働者の不満 鮮人側にも不満がある」『芸備日日新聞』1923年7月8日。

(58) 「職業紹介所から観た此頃の世相【上】」『大阪朝日新聞広島版』1925年2月4日。

の一は失業者とされていた⁽⁵⁹⁾。1925年後期の呉市の不況は深刻で⁽⁶⁰⁾、在呉の朝鮮人人口は男女総数176名にまで激減していた⁽⁶¹⁾。しかし、1926年には呉・広道路建設工事で再び朝鮮人労働者の人口は250名に増加したようである⁽⁶²⁾。1927年からは三呉線工事がはじまり、約300名の土木作業員の半分は朝鮮人であったという⁽⁶³⁾。

土木の日雇労働が多かった現場は生死に関わる苛酷な現場ばかりであった。1920～27年の死亡事故だけでも、賀茂郡川上村の山陽本線鉄道工事中の土砂崩壊で下敷になって死亡した季（ママ）泰成（30：慶尚南道昌原郡出身）⁽⁶⁴⁾、安芸郡大屋村の天応山土砂掘取工事での土塊崩落で即死した朝鮮人通称山口磯次（27）⁽⁶⁵⁾、佐伯郡飛渡瀬（江田島）の海軍重油槽運搬中の土砂崩壊で生き埋めとなり死亡した李今祐⁽⁶⁶⁾、佐伯郡小方村海面埋立工事に従事中土砂崩壊で圧死した福田鮮吉こと朴聖賢（20：慶尚南道密陽郡）ほか2名⁽⁶⁷⁾、安芸郡渡子島海軍工事場での土砂崩壊で即死した朴永寿（21）・瀕死の重傷を負った朴応全（25）⁽⁶⁸⁾、広島瓦電宮島線敷設工事における土地切取工事（草津町）の土砂崩壊で即死した許旬（31）⁽⁶⁹⁾、沼隈郡熊野村の福山市上水道水源工事場での土砂崩壊の下敷で即死した木村又吉こと孫己東（26：慶尚北道慶州郡）⁽⁷⁰⁾、広海軍工廠内での岩石破碎工事でダイナマイトが爆発した際、岩石が直撃して頭蓋骨粉碎で即死した李泰甲（20：慶尚北道慶州郡）⁽⁷¹⁾、尾道鉄道工事中に土砂積載列車が転覆し死亡した李文奉（28）⁽⁷²⁾、佐伯郡地御前村の広島電気の工事中の山崩れで生き埋めとなり即死した張文植（45：慶尚北道漆谷郡）⁽⁷³⁾、賀茂郡三津口町の海面埋立工事場での土砂崩壊で惨死した鄭寿煥（30）⁽⁷⁴⁾、同現場で後日同様の土砂崩れで圧死した李兌煥（31：慶尚北道昌原郡）⁽⁷⁵⁾、佐伯郡地御前村の山陽本線複線工事中に下関行列車に轢かれ

(59) 「西署管内の在留鮮人 三分の一は失業者」『中国新聞』1925年3月14日。

(60) 「呉市と鮮人の昨今の動静振」『呉日日新聞』1925年9月14日。

(61) 「呉市在住の朝鮮人の現在 男女で176人」『芸備日日新聞』1925年9月18日。

(62) 「呉市で働く朝鮮人 殆ど筋肉の労働者」『呉新聞』1926年9月10日。

(63) 「三呉線工事きのふから開始」『大阪朝日新聞広島版』1927年11月3日、「三呉線呉口起工 祝盃をあげる」『中国新聞』1927年11月3日。

(64) 「鮮人惨死 鉄道工事中土砂の下敷」『芸備日日新聞』1921年4月17日、「鉄道工事作業中土砂崩潰 鮮人工夫の死傷」『中国新聞』1921年4月17日。

(65) 「天応山の土塊崩落 鮮人工夫即死」『中国新聞』1921年6月5日。

(66) 「工夫生き埋めとなる」『大阪朝日新聞広島版』1921年8月14日。

(67) 「土方8名が土砂の下敷 3名が圧死」『芸備日日新聞』1923年2月28日。

(68) 「鮮人生埋 土砂に埋りて」『芸備日日新聞』1923年11月25日、「鮮人工夫の奇跡」『大阪朝日新聞広島版』1923年11月25日。

(69) 「鮮人工夫圧死す」『呉新聞』1924年1月14日。

(70) 「水源地土砂崩壊」『大阪朝日新聞広島版』1924年3月20日、「福山上水道水源地の土砂崩れ 人夫2名圧死す」『芸備日日新聞』1924年3月20日、「圧死した鮮人と日本人」『呉新聞』1924年3月20日。

(71) 「岩石飛来して頭蓋骨を砕かれ即死」『中国新聞』1926年1月29日。

(72) 「鮮人死亡 内地人重傷」『中国新聞』1926年3月23日、「電車が衝突顛覆し死者2名重傷者10名」『芸備日日新聞』1926年3月23日。

(73) 「鮮人生埋 地御前で即死」『中国新聞』1926年6月18日、「鮮人工事惨死」『大阪朝日新聞広島版』1926年6月18日。

(74) 「鮮人惨死す 土砂の下敷き」『大阪朝日新聞広島版』1927年6月25日。

(75) 「土工の圧死」『中国新聞』1927年11月22日。

死亡した土木作業員金亦岩（27：慶尚南道晋州郡）⁽⁷⁶⁾，安芸郡下蒲刈村の中央セメント石灰石採掘工事中に石灰石が墜落し胸部直撃で死亡した陳學久（34）⁽⁷⁷⁾，佐伯郡観音村の埋立地工事でトラックに轢かれ死亡した土木作業員金相彦（24）⁽⁷⁸⁾，呉市の石切場で作業中死亡した姜述先（28：慶尚南道釜山府）⁽⁷⁹⁾などが報じられた。重傷も含むと枚挙にいとまがないほどである。

日雇労働が中心であった在日朝鮮人の生活は困窮を極めていた。その第一の原因は民族差別に起因する低賃金や未払いであった。例えば、慶尚南道生まれの鄭邦元（22）は、「家庭が貧のドン底にあるを憂ひ」、1925年7月に渡航して広島で土木工事に従事していたが、体が弱くて続かず、呉市吉浦町の松下某方に漁網の手伝いをするようになり、9月13日まで務めた。しかし、「鮮人だといふので漁に出て一日労働しても僅50銭、皆が漁を休んだ日などは日給どころか食はしてもらふ事すら出来かねる様な有様」で、その間の36日間の給金18円も「お前には3円90銭貸しがある」と支払われなかったため、吉浦町の巡査派出所に出願し、「私はもう見込みがないから国へ帰って親達へ仕へたいと思います。就ては旅費がないから給金を貰ってくれ」と哀願し、最終的に貸金を引いた金が支払われたという⁽⁸⁰⁾。

土木作業員を失業した朝鮮人が飴売行商に転身するケースは「韓国併合」前後から見られたが⁽⁸¹⁾，1920年代も同様のパターンで飴売行商になる朝鮮人が多く、1925年の不景気の際には、失業で飴売になっても売れず、何とか売ろうとしてそれが「押売」「詐欺」と見なされるケースが多く見られるようになった。実際、同年6～8月には飴売＝詐欺という注意を警察各署が強く喚起しており、そのなかで豊田郡河内町、李鉢元（30）は「朝鮮開城人參で製した飴です万病に有効」と宣伝した件で取調べを受けた⁽⁸²⁾。なかでも慶尚北道出身の陳応寛（21）は「朝鮮人參飴と詐称」して飴を高額で売るとして各警察署が注意を呼び掛けるほど大きく報道されていた。陳は安芸郡吉浦小学校、賀茂郡広村女学校、福山中学校、福山師範学校、府中町中学校、双三郡日影館中学校・同女学校、三次中学校の校長に面会し、「真の朝鮮飴」という証明書を書きもらい、安佐郡大林、三入、可部、中原村役場では芳名録に署名を得て、それをもとに飴を売っていたという⁽⁸³⁾。呉では富籤的抽選によって飴を売っていたとして李漢祥（35）が逮捕され⁽⁸⁴⁾、「朝鮮飴オッチョコチョイ」

(76) 「トンネル内で鮮人工夫轢死」『大阪朝日新聞広島版』1927年7月27日。

(77) 「石灰石が墜落 土方惨死」『中国新聞』1927年11月17日、「鮮人惨死 石が墜落し」『芸備日日新聞』1927年11月17日。

(78) 「土方の惨死 トロの下敷き」『中国新聞』1927年12月9日。

(79) 「石切場で鮮人の惨死」『呉日日新聞』1927年12月20日、「大石に潰される 石工の惨死」『大阪朝日新聞広島版』1927年12月21日。

(80) 「働かした鮮人に金を払わぬ横着者」『呉日日新聞』1925年11月4日。

(81) 拙稿前掲論文「軍都広島における在日朝鮮人像の形成」。

(82) 「鮮人の飴売り 万病有効は詐欺」『中国新聞』1925年6月21日。

(83) 「飴を押売る鮮人」『大阪朝日新聞広島版』1925年7月16日、「芳名録を餌に朝鮮人參を売る鮮人」『中国新聞』1925年7月17日。

(84) 「飴売の朝鮮人が巧妙な詐欺 世人は注意せよ」『呉日日新聞』1925年7月21日、「コヨリ使用の飴売鮮人検事局送り」『呉公論』1925年7月21日。

と称し、抽選詐欺をしていたとして警官に逮捕されたが逃亡した金光景 (30) ⁽⁸⁵⁾ などのケースがあった。

困窮を極める生活

住居も不安定であったことが多くの記事で報じられていた。1923年8月頃の尾道では上水道工事、電灯工事に多くの朝鮮人作業員が雇用されていたが、「誰とて頼る人も無く木賃宿でも彼れ等を歓迎せぬので駅の待合所等で無作法極まる風体をしてベンチの上で寝る」状態であった⁽⁸⁶⁾。1924年7月頃の蒸し暑い広島駅でも、夜になると駅のベンチで寝ようとする朝鮮人が多く現れては駅員に追い立てられ、駅前のジャリで寝るが今度は巡査に追い立てられ、小暗い駅前郵便局と駅ホームの間の狭い小路が住処となっていたという。暑さを避けるために猿猴川堤防に多数の朝鮮人が寝ていた⁽⁸⁷⁾。実際、1925年3月の広島県の朝鮮人で一定の住居がある者は半分に過ぎなかったという⁽⁸⁸⁾。

困窮を極めた朝鮮人は警察署に救済を求めるケースが見られた。とくに福山市では福山署簡易救済会を1921年4月に創設し、他地域から福山に仕事を求めて来て困窮に陥った者に旅費を支給していたが、そのほとんどが朝鮮人であったという⁽⁸⁹⁾。双三郡の電気工事でいい儲け口があると聞いたが不景気で仕事がなく、無一文で福山まで歩いてきて救済を求めた慶尚北道星川郡出身の李貫石ほか4名には、福山上水道工事作業員に斡旋していたようである⁽⁹⁰⁾。広島市西署簡易救済会も同様で、広島市船入町人力車夫の朝鮮人金燦 (20) は1918年から同町で車夫をし、妻子3人を抱えていたが8月に盲腸炎になり、一家は「その日稼ぎの貧困な生活をしていたので十分薬事はおろか口に糊することもできぬ悲惨な状態なので病気は重るばかり現在では一家皆餓死せんばかり」になっていたため、西署が若干保護したが、「いつまでも支持することができず悲惨な状態」⁽⁹¹⁾であったという。

ただし、彼らは最初から警察に救済を求めたわけではない。慶尚南道生まれの安可用 (28) は、仕事を求めて広島へ来たが大不景気で、大須賀、水主、字品の各職業案内所を訪問したが、掃除作業員すらなく、融和団体の朝鮮人労友会の紹介部へ行き、筋肉労働者の飯場を片っ端から訪問するも仕事がなかったので、「食ふや食はずで警察へ」たどりついたのである⁽⁹²⁾。

とくに悲惨であったと報じられるのが軍縮不況にあえぐ1925年頃の呉であった。大邱生まれの高仕斗 (27) は、呉の岩崎石鹸店に雇われたが日給1円で食うこともできず兄は病気にかかり、帰国しようにも旅費がない。キリスト教の宣教師に7円を恵んでもらい、それでも帰国には足りず、

(85) 「不埒な鉛売鮮人 警官が同行中逃走」『呉新聞』1925年8月21日、「抽籤詐欺の鉛売鮮人 警官と同行途中逃亡す」『呉公論』1925年8月21日。

(86) 「駅の待合所で寝そべる鮮人」『中国新聞』1923年8月29日。

(87) 「蒸し返る夜の暑さを広島駅前のジャリに寝る鮮人」『芸備日日新聞』1924年7月30日。

(88) 「県下の朝鮮人 住居の一定せるものは半分」『呉公論』1925年3月19日。

(89) 「福山署簡易救済会創設して丁度1年」『中国新聞』1922年4月6日。

(90) 「鮮人を救済」『芸備日日新聞』1923年1月31日。

(91) 「憐れな鮮人 西署が保護」『中国新聞』1927年10月13日。

(92) 「業を離れたが最後就職の道は無い」『芸備日日新聞』1925年1月9日。

聖書を抱えて呉署に哀願にやってきたという⁽⁹³⁾。慶尚北道金泉郡出身の鄭孫寶（38）、妻アキノ（27）、長女ツタ（5）、次女フジ（1）一家は、鄭が呉市飯田組の飯場に入り、土木工事に従事していたが1925年3月に土砂崩れで足腰の立たぬ重傷を負い入院してしまい「赤貧洗うがごとく」状態に陥った。健康も回復せず、6月下旬に吉浦町に移住。糊口に苦しみ子供も飢餓状態に陥ったため、同町の巡査が同情して「有志の涙」を求め、白米1斗や現金2円弱、日用品などが提供された⁽⁹⁴⁾。

朝鮮女性の置かれた困窮状況はさらに深刻であった。家族ぐるみで夫の稼ぎに依存している場合、夫の負傷・病気によって家族全員が苦境に陥ることは前述のとおりであった。広島市では不況にあえぐなかで、「窮状に乗じた不正な周旋業者が7つ、8つの（朝鮮人）女の子を50円乃至100円位で売買している模様あり」⁽⁹⁵⁾と、幼少の朝鮮女性の人身売買が行われている様相が報じられていた。軍都呉では朝鮮料理屋・飲食店を通じて兵士（水兵など）を相手にした性売買が盛んになり、そこで朝鮮女性が性搾取されるとともに違法な性売買として朝鮮女性のみが取調べを受けるケースが報道されているが、専ら朝鮮女性＝「密淫」「淫売」とする蔑視の目線で報じられていた⁽⁹⁶⁾。また、三呉線起工で活気づく三原では、置屋が進出するようになり、そこには多くの朝鮮人芸妓がいたという⁽⁹⁷⁾。

こうした在広朝鮮人の不安定な生活状態を背景に、窃盗を犯したとして朝鮮人労働者が疑われ追跡、逮捕されるケースも多く見られた⁽⁹⁸⁾。一定の生業がなく金銭を無心する場合、その相手は言葉の通じない日本人ではなく朝鮮人の場合もあり、それが日常的なゆすり・たかりになることもあった⁽⁹⁹⁾。

ここまで挙げてきた在広朝鮮人に関する生活・貧困・犯罪に関する新聞報道は、確実に朝鮮人＝窃盗、犯罪、怠惰という劣位のイメージを社会に刻印することになったといえる。1925年12月に宇品、観音村、吉島町方面で「毎夜のやうに畑荒し」があった際も、広島郊外の貧民窟に住む朝鮮人労働者の毎日仕事がなく、3、4日食う飯もないあまりに悲惨な状況に疑いの目が向けられ、「コソ泥の根拠地はほとんどこの貧民窟といってもよいくらいであるらしい」⁽¹⁰⁰⁾と報道されていたのである。もちろん事実として確定できるものではない。

(93) 「呉署へ泣つく鮮人 働けど食へぬ哀れな兄弟」『中国新聞』1925年4月21日。

(94) 「異郷の空に貧と病で虐まれている一家 近隣の同情に親子4人蘇る」『芸備日日新聞』1925年10月21日、「憐む可き鮮人一家 凍餓より脱る」『呉公論』同日、「貧苦と闘ふ鮮人一家へ同情忽ち集る」『呉日日新聞』同日。

(95) 「喰ふに喰へぬ鮮人の少女を二束三文に買ひ歩く」『中国新聞』1925年12月14日。

(96) 「朝鮮美人春を売って7日の拘留」『呉新聞』1926年4月5日、「鮮人の売春婦 呉署に検挙」『呉新聞』1926年5月2日、「日鮮人の売笑婦」『呉日日新聞』1927年1月20日、「鮮人仲居の密売」『中国新聞』1927年5月2日、「朝鮮仲居売春 日本語は通ぜぬ」『芸備日日新聞』1927年9月4日。

(97) 「沿岸線起工で三原町活づく 朝鮮芸妓も現はれ」『芸備日日新聞』1927年6月11日。

(98) 「尺余の白鞘を抜き鮮人の強盗」『芸備日日新聞』1921年4月19日、「支廠内で窃盗 鮮人夫婦2名」『中国新聞』1921年4月19日、「上瀬野の強盗は鮮人土方の所属か」『芸備日日新聞』1921年4月21日。

(99) 「ごろつき二鮮人 罪を酒に被せる」『芸備日日新聞』1923年1月24日。

(100) 「野荒しで生きる鮮人の群 その哀れな生活振り」『大阪朝日新聞広島版』1925年12月18日。

(2) 「不逞鮮人」像の形成と官民の差別・取締り・暴力の展開

——関東大震災を前後して朝鮮人・日本人の争闘事件

前述した福島紡績福山工場の二度にわたる女工を中心としたストライキ以外に、1920年代においては、これまで1927年広島県豊田郡田浦村三呉線工事場の朝鮮人労働者による賃上げ要求⁽¹⁰¹⁾、1928年広島市吉島町の広島鉄工所労働者131名のうち朝鮮人51名による広島一般労働組合の支援を受けた争議（賃上げ、職業手当他）、1931年5月同鉄工所での工場閉鎖をめぐる争議（朝鮮人労働者・臨時工が総同盟広島労働組合と広島鮮友会の支持のもとで会社と交渉、解雇手当・金一封支給で妥結）⁽¹⁰²⁾、1929年6月福島紡績福山工場での朝鮮人労働者65名スト⁽¹⁰³⁾、などが明らかにされてきた。

多く指摘されてきたのが日本人労働者と朝鮮人労働者の「争闘事件」である。1922年6月安芸郡渡子島村（現音戸町）の朝鮮人労働者170名と同村民数十名が「対峙」し、警察官40数名に憲兵が応援して鎮静化した⁽¹⁰⁴⁾。この事件は後述するように、郷土新聞が在広朝鮮人＝「不逞鮮人」と見なし大きくフレームアップされた。ほかにも、1918年6月20日呉市吉浦道路工事に従事中の日本人・朝鮮人の争闘事件、広島市西引御堂前街路での日本人・朝鮮人争闘⁽¹⁰⁵⁾などが指摘されてきたが、他方で労働団体の歴史は1922年の朝鮮人労働同盟契と結誼（広島）、1924年の広島朝鮮人労友会以外に目立った組織運動は指摘されていない⁽¹⁰⁶⁾。

【表4】を見ると、郷土新聞に見る争闘事件報道は非常に多い。その内容の大半は日本人・朝鮮人土木作業員の争闘と朝鮮人土木作業員同士の喧嘩である。前者については、日本人側の差別・暴言・暴力が発端となったものが多い。1921年5月には呉海軍建築部広村出張所の日本人土木作業員5名が飲酒で酩酊し、同じく飲酒していた朝鮮人土木作業員4名を罵倒して大格闘になり、朝鮮人土木作業員1人が重傷を負ったため、附近にいた朝鮮人土木作業員百数十名が押しかけ、日本人土木作業員数十名も集って大格闘に発展した⁽¹⁰⁷⁾。同年7月、双三郡和田村の堤防工事の現場では、土砂ではなく石塊を入れたなどとの言いがかりをつけて日本人土木作業員3名が朝鮮人土木作業員を殴打したため、人数の多い朝鮮人土木作業員と大格闘になり、日本人土木作業員が猟銃を乱射する事件が起きている⁽¹⁰⁸⁾。1923年6月2日には山陽本線赤坂駅で敷設工事の朝鮮人土木作業員30余名と日本人土木作業員数名の口論がきっかけで、そこに村落の若者二十数名が加勢して日本人数名が負傷、朝鮮人1名が重体に陥った争闘事件⁽¹⁰⁹⁾、1924年6月には太田川発電所工事場での日本人・

(101) 朴慶植前掲書、176頁。

(102) 前掲『広島県史 近代2』578-579頁。

(103) 朴慶植前掲書、198頁。

(104) 前掲『広島県史 近代2』576-577頁。

(105) 朴慶植前掲書、176頁。

(106) 朴慶植前掲書、123-124頁

(107) 「日鮮人土方の格闘」『芸備日日新聞』1921年5月20日、「日鮮人の大争闘」『中国新聞』1921年5月20日、「傷害罪として検事局送致」『中国新聞』1921年5月21日。

(108) 「鮮人入夫の宿舍への発砲」『中国新聞』1921年7月19日、「鮮人に猟銃乱射」『芸備日日新聞』1921年7月21日。

(109) 「些細な事から日鮮人夫入乱れて闘ふ」『中国新聞』1923年6月4日、「内鮮人70余名赤坂駅東で乱闘」『芸備日日新聞』1923年6月4日。

朝鮮人土木作業員の大格闘事件⁽¹¹⁰⁾、同年7月26日呉市街路での日本人氷屋と朝鮮人飴屋の殴り合いに附近の多数の日本人・朝鮮人が加勢した大格闘事件⁽¹¹¹⁾、1925年4月10日広島市大手町の広島電気会社裏貯水池で就業中に江川組土木作業員頭が朝鮮人土木作業員を殴りつけたことがきっかけで30～40名の朝鮮人作業員が棍棒等で復讐し重傷を負わせた事件⁽¹¹²⁾、同年10月24日御調郡尾道鉄道作業場の日本人作業員部屋で飲酒中に日本人作業員が朝鮮人作業員を殴打したことがきっかけで日本人作業員が重傷を負った乱闘事件⁽¹¹³⁾、1926年2月13日双三郡作木村広島電気第二発電所工事中に山路組の朝鮮人作業員5名が空腹のため大林組の前田飯場で食事を願ったところ断られたうえ、日本人作業員20名によって袋叩きにされたことがきっかけで、加勢した日本人側がドスや短刀、銃を用いて暴力をふるい、近くにいった朝鮮人作業員多数が包囲して投石で対抗し、100余名の大乱闘となった事件⁽¹¹⁴⁾、同年8月20日呉広間道路改修工事に従事していた藤田組の使用人某が都組の朝鮮人作業員をいきなり棍棒・ビール瓶で重傷を負わせたことがきっかけとなった両組数十名による争闘事件⁽¹¹⁵⁾、同年10月1日賀茂郡西高屋駅開通式余興場で朝鮮人炊事場に地元の日本人が放尿したことがきっかけで45名の負傷者を出す大乱闘となった事件⁽¹¹⁶⁾など、数十～数百名の大争闘事件が多く発生していた。より小規模なものは枚挙にいとまがないほどである。朝鮮人同士の乱闘事件も多く報道されているが、多くは飲酒中や作業員組同士の感情的諍い、金銭問題、痴情などが中心である⁽¹¹⁷⁾。

これまで取り上げられてこなかった罷業もある。1922年11月25日広島市外牛田村の水源池配水池工事に従事していた朝鮮人約100名が1カ月以上にわたる賃金未払いを理由に同盟休業をした⁽¹¹⁸⁾。朝鮮人共済会長の斡旋で罷業は一旦解散したが⁽¹¹⁹⁾、賃金の支払いをめぐる12月まで紛擾が続いた⁽¹²⁰⁾。1924年1月6日には呉軍港外三子島海軍廃艦材改削工事に従事する朝鮮人土木作業員約300名が工事請負業呉市水野組に連判状を出し、「終日苦役に従事して日給2円を得るものは稀で之では家族を扶養することはできない」と賃金3割増しを要求して罷業し⁽¹²¹⁾、賃金2割増し

(110) 「太田川発電所の日鮮人格闘取調終了」『中国新聞』1924年6月24日。

(111) 「氷屋と飴屋の喧嘩から日鮮人入乱れて格闘」『中国新聞』1924年7月29日。

(112) 「鮮人団兇器を揮ひ日本人土工を半殺し 電気会社内の乱闘」『中国新聞』1925年4月11日。

(113) 「日鮮廿余名暗夜乱闘 御調郡市村で」『呉日日新聞』1925年10月26日、「市村日鮮人の乱闘 乱暴鮮人4名引致さる」『中国新聞』1925年10月26日。

(114) 「作木村の広電発電所工事で土工大乱闘」『中国新聞』1926年2月15日、「内鮮人が大争闘」『呉日日新聞』1926年2月15日、「発電所乱闘事件」『中国新聞』1926年3月16日。

(115) 「阿賀峠で廿日の真夜中から多数の日鮮土工が大乱闘」『呉日日新聞』1926年8月22日。

(116) 「炊事場に放尿が原因で余興場で日鮮人乱闘」『芸備日日新聞』1926年10月5日。

(117) 例として「年賀酒の上で鮮人同士の喧嘩」『中国新聞』1920年1月9日、「鮮人土方の格闘 大河の血塗れ騒ぎ」『芸備日日新聞』1921年4月28日、「白島長寿屋で鮮人廿余名の格闘 乱酔の勘定が元で」『芸備日日新聞』1921年8月17日はか多数。

(118) 「配水池工事の鮮人約100名が盟休し大挙して事務所に迫る」『大阪朝日新聞広島版』1922年11月26日、「鮮人夫大挙して水源池に暴れ込む 理由は賃金の不払」『中国新聞』1922年11月26日。

(119) 「鮮人共済会長の斡旋で同夜は一先解散」『中国新聞』1922年11月27日。

(120) 「水源地工事費騒ぎ 漸く収まる」『芸備日日新聞』1922年12月15日。

(121) 「鮮人土方300名連判して賃銀3割上げの要求」『大阪朝日新聞広島版』1924年1月10日。

を勝ち取っている⁽¹²²⁾。

1926年4月25日に大韓帝国最後の皇帝純宗が死去すると、それを契機にソウル各所で独立示威運動が行われた（6・10万歳運動）。広島でも1926年5月9日、広島市在住の朝鮮人（学生・労働者中心）約300名が東練兵場に集合して望哭式を行い、朝鮮王宮の方向に向かって哀悼の意を表したことが報じられていた⁽¹²³⁾。

広島における「不逞鮮人」像の形成——関東大震災前後

「韓国併合」前から、広島県深安郡加茂村地方で、言葉の通じない新たな「韓人」に対し、警戒を強めるだけでなく、「放火をなしたる者」という噂が立って、自警団、警察が取締りに動くという、のちの「不逞鮮人」像につながる朝鮮人像が出てきたことや、1910年代末に三・一運動に代表される朝鮮半島での民族運動に対する「不逞鮮人」像が加わり、在広朝鮮人に対しても、「不逞鮮人」視の萌芽が見られるようになってきていた⁽¹²⁴⁾。

1920年代前半の郷土新聞でも在広朝鮮人を「不逞鮮人視」する記事が多く見られるようになる。その特徴は3点ある。一つ目は、広島全体での警察・メディアによる犯罪＝朝鮮人という偏見の増幅である。1921年8月初旬、備後赤坂駅前の伊藤運送店の家人3人に対する強盗殺人事件が発生した際、尾道警察署は「鮮人に相違無し」との捜査方針を立て、22名の朝鮮人に嫌疑をかけた⁽¹²⁵⁾。この2名を取締るために広島県全土で捜査が拡大し、広警察署は広工廠支部建設工事に従事する朝鮮人を「風殺（風潰し）」に捜査し、私服刑事が広村居住の「鮮人住宅を襲はしめ」るほどであった⁽¹²⁶⁾。安佐郡祇園警察署は朝鮮人2名の人相を詳細に印刷通知、青年団、在郷軍人会と協力して警戒し⁽¹²⁷⁾『中国新聞』は「備後赤坂駅前の3人殺しは朝鮮人の凶行と判明す」⁽¹²⁸⁾と完全に犯人扱いしていた。しかし、犯人は横田勇と判明し⁽¹²⁹⁾、朝鮮人への嫌疑は冤罪であった。

広島県警察全体が朝鮮人を厳格に警戒していたさまがわかるのが以下の記事である。

亡国の民として日本内地に渡来した朝鮮人は年々その数を増し日本全国に散在して彼等の社会的勢力も漸次強大になりつつあるので政府に於ても非常に注意を払っているが彼等の中には社会主義者共産主義者等もありて各地の鮮人同士が糾合して自国の復興を図らうといふ不逞な企画を抱いている者もある模様で不逞鮮人として当局では嚴重警戒しているが先に一味の者は関西に朝鮮人関西大同盟なる団体を組織し不逞なる画策をなさんとする模様があったので当局に於ては大恐慌を来し嚴重取締っているが広島県警察部に於ては県下には多数の鮮人労働者在住し組織の甚大なる団体もありてその赤化

(122) 「三子島鮮人の労働争議妥協？結局2割の賃金値上げの承認」『呉新聞』1924年1月15日。

(123) 「在広鮮人が望哭式 昨夜東練兵場で」『呉日日新聞』1926年5月10日。

(124) 拙稿前掲論文「軍都広島における在日朝鮮人像の形成」。

(125) 「鮮人に相違無しとの見立て尾道三原捜査方針一変」『芸備日日新聞』1921年8月18日、「久井方面で捕へた犯人嫌疑者は釈放」『中国新聞』1921年8月18日。

(126) 「鮮人を風殺 赤坂3人殺事件広署の大活動」『大阪朝日新聞広島版』1921年8月20日、「鮮人の住宅を襲ふ広警察署活動」『中国新聞』1921年8月20日。

(127) 「犯人の人相など詳細に印刷して 祇園警察署活動」『中国新聞』1921年8月20日。

(128) 『中国新聞』1921年8月20日。

(129) 「凶悪極まる備後赤坂駅前一家3人殺し犯人横田勇」『中国新聞』1921年8月30日。

に危惧し各警察署高等部をして厳重警戒中である⁽¹³⁰⁾

1923 年を前に、朝鮮人社会主義者・民族主義者を「不逞鮮人」と捉え、広島県警察をあげての警戒を激しく強めていたことがわかる。

二つ目が、関東大震災時に見られた、朝鮮人男性が日本人女性を強かんするといった虚偽情報「レイピスト」神話の官民双方からの流布が⁽¹³¹⁾、広島では震災前から見られたことである。すでに 1919 年 5 月頃から広村でこうした流言が発生しており⁽¹³²⁾、1923 年 5 月にも佐伯郡廿日市でこうした流言が発生した。この附近の山陽本線広島・宮島間複線工事で多数の朝鮮人作業員がおり、彼らに対して「殊に婦女子を脅かす事甚だしく彼等鮮人のため凌辱されたものも多数ある由で人心恐々婦女子は日没後外出するものなく地方民の激昂極度に達し一挙に彼等を厳戒すべしなぞと憤慨するものもありて一般に殺気立ちて居る」という物騒な状況になっていた⁽¹³³⁾。もちろん、福重警察署長はその噂を否定していた⁽¹³⁴⁾。尾道上水道工事、電気鉄道工事で多くの朝鮮人労働者のいた尾道でも、困窮を背景に町付近の山手に野宿、駅待合室や荷物置き場で彼らが野宿することで、それへの不安から少女が朝鮮人に凌辱されているという噂が出ていたという⁽¹³⁵⁾。

第三に、とくに軍都呉市で「不逞鮮人」像の流布とそれに基づく官民の朝鮮人を警戒・取締ろうとする行動が激しく見られた点である。1921 年 7 月 30 日、呉新宮隧道入口に数本の材木が置かれていた際、列車の転覆をたくらむ吉浦道路工事に従事する朝鮮人のしわざとして警察の捜査が行われたが⁽¹³⁶⁾、その後追跡報道なくデマの可能性が高い。

1923 年 3 月には、安芸郡の海軍火薬庫に収めていた雷管 500 個が紛失した事件を「不逞鮮人」の朝鮮人労働者 2 名のしわざとして呉警察署と憲兵分隊が搜索するも見つからず、朝鮮半島に逃亡したと報じられた⁽¹³⁷⁾。呉警察署は高等課・社会課・非番総がかりで呉駅・吉浦駅・波止場を警戒し、「朝鮮独立運動を宣伝すべく間島辺の不逞鮮人本部から派遣された男」が九州北部の炭田に姿を現して姿を消し、呉に現れたとしているが⁽¹³⁸⁾、その後続報はなく、これも官憲が抱く「不逞鮮人」像の「黒き幻影」による冤罪である可能性が否めない。

そして、その半年後、関東大震災後、「東京方面に於ける大地震以来、呉市に於ても種々の流言飛語を伝える者があるので、呉警察署に於ては極力捜査」⁽¹³⁹⁾という報道がなされた。同日の記事

(130) 「大それた企画を抱く不逞鮮人警戒 市内の各警察署で」『中国新聞』1922 年 12 月 29 日。

(131) 金富子「関東大震災時の「レイピスト神話」と朝鮮人虐殺——官憲史料と新聞報道を中心に」（『大原社会問題研究所雑誌』第 669 号、2014 年 7 月）。

(132) 「物騒な広村——女教員を強姦の噂」『中国新聞』1919 年 5 月 14 日。この点については拙稿前掲論文を参照されたい。

(133) 「鮮人の粗暴」『芸備日日新聞』1923 年 5 月 20 日。

(134) 「電車軌道工事中の鮮人 輪姦は嘘だと福重署長否認」『中国新聞』1923 年 6 月 5 日。

(135) 「頻々たる悪事 尾道在住鮮人少女凌辱の噂」『中国新聞』1923 年 8 月 31 日。

(136) 「列車の転覆を企つ 新宮隧道入口に数本の材木放置」『中国新聞』1921 年 8 月 1 日、「軌道に材木 隧道の入口」『芸備日日新聞』1921 年 8 月 21 日。

(137) 「海軍火薬庫の雷管五百紛失」『芸備日日新聞』1923 年 3 月 21 日。

(138) 「不逞鮮人捜査」『芸備日日新聞』1923 年 3 月 23 日。

(139) 『芸備日日新聞』1923 年 9 月 4 日。

は以下のように報じている。

呉海軍工廠に於ても、市外吉田町に在る海軍火薬庫及び安芸郡江田島の火薬庫及び重要物に対して各三百名の兵員を増派し、要所々々に立ち番せしめ厳重なる警戒をしている。折柄2日午後呉市今西通3丁目付近を爆弾を携えた数名の鮮人が密かに歩行し居るを一通行人が発見し、直ちに鎮守府に急報し来たりたるを以て、鎮守府に於ては時節柄大いに驚き、憲兵分隊及び呉警察署に急報、応援を求め、非常線をはり、前記鮮人の逮捕に努めているが、逸早く遁走した彼らは未だ影を見せぬ⁽¹⁴⁰⁾

根拠のないデマに鎮守府が大げさに動き、軍隊・警察が物々しく動く構図は関東大震災時の朝鮮人虐殺の際と同じである。地方でも流言によって迫害が発生した可能性が指摘されて久しいが、たとえ流言から虐殺への飛躍が未遂に終わったとしても、こうした認識に基づく行動が官民、メディアにおいて反省されることなく繰り返されれば、官民が流言一つで殺戮に向かう可能性のある治安行動もまた継続的になされることになる。

実際、関東大震災の1年後も、呉では実際に起こった震災時の朝鮮人虐殺への追悼や省察が行われることは一切なく、むしろ以下の記事のような様相が繰り返されたという。

9月1日の関東大震災の記念日を期し不逞鮮人の一味が震災当時殺害された多数鮮人の為め報復を図り種々画策して居るとの情報があるので各地に於ても警戒して居るが不逞鮮人の一味が県下へ流れ込むかもしれぬと注意中の所朝鮮の過激派義烈団の一味が呉市に潜入し何事が画策して居る形跡があるとの風聞が立ちそれがあらぬか呉署高等課では数日前から秘密に活動を開始して居る⁽¹⁴¹⁾

おわりに——軍都広島近代史を在広朝鮮人史から捉えなおす

1920年代の植民地期における朝鮮人の来往とその就業形態・生活状況について簡単にまとめておきたい。

在広朝鮮人人口は渡航政策の変化と対応して推移しており、これは全国の在日朝鮮人人口の推移と連動している。在広朝鮮人の就業は、1920年前後から工業関係が圧倒的に多く、土木関係、繊維工業（女工が多い）、商業（飴売行商ほか）、旅宿・飲食店など広範囲にわたり、1920年中盤には職業の多様化がさらに進行し、有配偶者も増加した。しかし、いつでも解雇できる不安定な境遇であった点は一貫して変わりがなかった。また、人口が従来の広島市、呉市、福山市など都市部・沿岸部への偏在から最北部の比婆郡、北西部の山県郡、東部の甲奴郡にも朝鮮人人口が広がり、福山など女工の多い地域もあった。1930年の国勢調査を分析することで、こうした点がより浮き彫りになった。

郷土新聞からは、さらに在広朝鮮人の苛酷な就業・生活状況が見えてくる。朝鮮人土木作業員は、広島県全体のインフラ整備に関わっていたが、現場は生死に関わる苛酷な現場で死亡事故が頻出し、その生活は困窮を極めていた。第一の原因は民族差別に起因する低賃金や未払いである。土

(140) 「火薬庫警戒 爆弾を携へた鮮人」『芸備日日新聞』1923年9月4日。

(141) 「義烈団の一味呉に潜入の噂／大震災の報復に或種の行動に出でんとの説／呉署高等課大活動」『中国新聞』1924年8月31日。

木作業員を失業して飴売行商に転身するケースが見られたが、彼らには飴売＝詐欺というイメージが醸成されていった。また、朝鮮人女性は朝鮮人男性より賃金も低く、困窮を背景に違法な人身・性売買業のなかで搾取されるなど、人権侵害もさらに深刻であった。

朝鮮人・日本人の争闘事件も多く発生し、日本人側の差別・暴力が発端となったものが多いが、事件の数は従来指摘されてきたよりもはるかに多く、ストライキも多く発生していた。植民地朝鮮における植民地戦争を軍隊・警察・民衆が経験し、苛烈な軍事暴力が繰り返されることで、朝鮮民族運動への「潜在的恐怖」を伴う、殺しても構わないとする「不逞鮮人」像が広く内面化されていく一方で、日本社会で暮らすようになった在日朝鮮人に対する「不逞鮮人」像は、こうした民族運動に対する「不逞鮮人」像に加えて、在日朝鮮人に対する独自の偏見が加わりながら、関東大震災に向かって官民双方、そしてメディアによって増幅されたイメージとして蓄積されていく。

それは震災時に虐殺が起こらなかった地方、広島でも起こった現象である。関東大震災時に見られた、朝鮮人男性が日本人女性を強かんするといった虚偽情報「レイピスト」神話の官民双方からの流布は、広島でも見られた。また、軍都である呉市で、「不逞鮮人」像の流布と朝鮮人に対する警察・自警団の警戒が激しく見られた点には、爆弾など武器の朝鮮人への流出を恐れる警察・自警団の民族運動に対する「不逞鮮人」像の在広朝鮮人への転嫁を見ることができるのではないだろうか。実際の殺戮がなかったぶん、「不逞鮮人」を警戒し監視する体制と思想は、軍都呉で関東大震災後も繰り返されたと展望することができる。

郷土新聞のこうした記事は、あくまで在広朝鮮人の歴史に接近するための「断片」に過ぎない。しかし、膨大に集まった「断片」は、これまで軍都・移民県の産業発展とそこで働く労働者としての側面か、労働組合の組織運動論として描いてきた広島近代史や広島の在日朝鮮人史に対して、彼・彼女らの置かれた生活の実態や、彼・彼女らを労働力として必要としつつも、他方で過剰なまでに蔑視と憎悪を膨らませ、冤罪も含め取締りの対象と見ていく近代日本の官民のありようを決して軽視してはならないことを示していると考ええる。

（しん・ちゃんう 法政大学社会学部教授）